The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	モノを描く : 16世紀における「絵画の変」(2)
Author(s)	並木, 誠士
Citation	デザイン理論. 2005, 47, p. 128-129
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52987
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

モノを描く
── 16世紀における「絵画の変」(2) ──

並木誠士／京都工芸繊維大学

筆者は，意匠学会第42回大会で「風俗画成立に関する一考察 ── 16世紀における「絵画の変」」という発表をおこなった。今回の発表はその続編にあたる。筆者は，日本の16世紀が，さまざまな面で文化変容の時期であったと考えているが，その点について，今回は「モノ」という側面から考えてみた。ここでの「モノ」の特性は，種の区別が可能であるような具体性と観賞の場にあっては複数が並列される羅列性である。

発表では，まず「扇の草子」と貝合せに用いられる「合貝」を例として，「モノ」の絵画化を分析した。つぎに，そのような傾向が生まれた背景として和歌などの16世紀における在り方を考察し，最後に，17世紀絵画への展開について考えた。

「扇の草子」の分析からは，この時期に，和歌の絵画化として「モノ」を単独で描くような傾向が指摘できた。また，一連の「扇の草子」のなかには，語呂合わせのような歌絵が存在する。そこでは多くの場合，「歌語」に対して，日常的で卑俗な語を対応させることが多い。そこに日常的な「モノ」が登場する契機が生じる。雅俗の交錯である。

一方，16世紀から17世紀にかけて，日常の遊戯具であると同時に，婚礼のシンボルでもあった合貝は，16世紀にはすでに絵柄のだいたいの傾向が確立していた。合貝には，花・鳥・動物などの特定の種をおおきく単独で取りあげる絵柄が多い。取りあげる種には，通常の四季花鳥図には登場しない動物や鳥・花が多く含まれ，しかも，それぞれは種の特定が可能であるような表現である。また，当時の人びとの日常生活を彩っていたさまざまな器物も描かれており，それぞれは，添景としてはともかく，主体的には絵画化の対象になったことがない「モノ」である。

「扇の草子」は和歌の絵画化であり，合貝の絵柄も和歌に結びつくものが多かった。したがって，これらが制作された背景を知るには，この時期の和歌をはじめとする文学享受の様相について考える必要がある。

16世紀には，古典的な和歌が「古今伝授」などのかたちで伝承される一方で，古歌の本歌取りやさらにはパロディと言えるものが作られ，また，謡曲などでも古典和歌の焼き直しがおこなわれている。そのような状況のなかで，発表では「物名」に注目した。和歌の世界では，「「モノ」→和歌」というように，詩形式を誘発する契機として「モノ」が存在していた。そして，その場合に，日常的な「モノ」を雅びな和歌に意図的に詠み込むことがしばしばおこなわれた。つまり，詠歌の契機として日常的な「モノ」をあげることが，和歌の世界では定着していたのである。これもやはり，一種の雅俗の交錯である。

また，16世紀には「謎かけ」が流行する。謎かけの基本的な形式は，散文あるいは韻文の謎かけ文により，ある名辞を答えさせるもので，謎かけの部分が五七五七七の和歌形式になっている例も多い。16世紀には貴顕の知的な遊戯として楽しまれていた。そして，この謎かけは，基本的に言葉を「モノ」に置き換える遊戯であり，ここでも，和歌と「モノ」，「モノ」と絵画という関係が成立している。

さらにこの時期には，職人歌合絵が享受さ

れる。職人歌合絵成立の背景には，さまざまな職人が成立し，それが和歌を興じる人びとの関心事となっている状況が想定できる。16世紀には，それらの職人が京の町なかに店を構えるようになったことも報告されているため，この時期には，さまざまな職種の職人が人びとの生活のなかに定着し，それにともない，職人の製造物や職人のシンボルともいえる道具が「モノ」として人びとの意識にのぼるようにもなった。現存する職人歌合絵は，それぞれの職人のシンボルとしての道具や製造品を描いている。つまり，職人への関心とは，その製品や道具への関心であり，それが詠歌の対象となっているところに，16世紀的な「モノ」への関心の高まりを確認することができる。そして，その背景にあるのが，和歌世界つまり雅と職人の世界つまり俗とを交錯させて，そのギャップを楽しむ状況であり，それは，さきに指摘した物名や謎かけと共通する感覚である。そして，その職人歌合絵から和歌という文学的要素が払拭され，風俗に関心が向かった17世紀の初頭に，職人の様態をより精細に描いた職人尽図が成立することになる。

16世紀において，俗を取り込んだ絵画は，「扇の草子」や合貝のように，あるいは職人歌合絵のように，文学や遊戯といった絵画以外の要素に付随しており，観賞絵画として自立してはいなかった。しかし，17世紀にはいると，誰ヶ袖図，柳橋水車図，武蔵野図といった新しい主題が成立する。これらは，いずれも和歌との関係が指摘できるが，これらは一般的な山水図や花鳥図とは一線を画する無機的な，つまり生命感のない空間構成に特徴がある。そして，このような単一の「モノ」を大画面に展開してゆく傾向の背景に，「モノ」の絵画化が想定できる。これらの作品は，いまだに「モノ」の周囲に現実空間の名残がとどめられているものの，空間ではなく，特定の「モノ」を表現してゆく方向性を明らかに示している。そして，「モノ」の絵画化が障屏画というかたちで大画面化することは，「モノ」が文学や遊戯から自立して観賞性が増したことをものがたる。

身近な人びとへの関心がこの時期に風俗画を生み出し，一方で，ここで見たような身近な「モノ」への関心が，誰ヶ袖図や柳橋水車図のようなあらたな画題，作品を生み出すことになった。この時期，絵師はみずからが目にした多様な「モノ」をつぎつぎとレパートリーに加えていったと考えられる。そして，それを羅列し，また，拡大するところから新しい絵画が生まれたのである。洛中洛外図における旧町田家本から舟木本への変化は，絵師みずからが都の人びとを観察して手に入れた視覚情報を惜しげもなく画面に落とし込むようになった変化であった。京の町の変化は言うまでもないが，それ以上に，注文主，絵師および鑑賞者の関心の変化に起因する。当然のことだが，舟木本は「写実的」ではありえない。多様な風俗に対する関心が，絵師に画像の蓄積を促し，それを羅列的に描くことにより風俗画が成立した。つまり，初期の風俗画にも，ここで見たような多様な事象の羅列性，網羅性が指摘でき，同時に，事象の描き分けにともなう具体性も含まれていたのである。

一見相反するような「モノ」の絵画化と風俗画の成立というふたつの美術史的な出来事の背後には，ここで指摘したような16世紀美術の特質が存在したことがわかる。その点で，16世紀は，絵画史におけるひとつの転換点だということが言えるのである。